

西中われら



学校の教育目標：自ら学ぶ 共に生きる 努力一輪 4本柱：授業、挨拶、掃除、合唱

「心豊かな子ども」を育てる

校長 細井 孝治

桃の節句がやってきます。私には2人の娘がおり、我が家にも小さなひな人形があります。子どもの健やかな成長を願ってひな人形を飾る親の気持ちは、いつの時代も変わりはありません。しかし、その人形に込める思いが、ともすると「親の自己満足や見栄」というような薄っぺらなものになっているのではないかと、私自身、思うことがあります。

この時期になるといつも思い出し、温かい気持ちにさせてくれるお話（ある女性から新聞に投稿された手記）があるので紹介をします。

私には、小学校3年の時の、忘れられない思い出があります。

友達がある日「うちは大きなおひな様を買ったよ。」と教室で自慢しました。そして、ひとしきり自慢した後で、私にも聞いてきました。「あなたの家は女の子が4人もいるから、さぞかし立派なおひな様があるでしょうね。」



私は4人姉妹の長女として育ちました。でも、私の家は貧しく人形を買うようなお金なんてとてもなかったので、答えに詰まってしまいました。私は、結局「ない」という一言が言えなくて、情けない気持ちで帰りました。そして、家に帰ってからもずっと暗い気持ちでいました。でも、とうとう黙っていられず、その夜、お風呂でそのことをお母さんに正直に言いました。

するとお母さんは、私の顔をじっと見つめて、「うちにはかわいいおひな様が4人もいるから、お母さん人形なんかなくてもいいんだよ。」と言ってくれました。私は、それを聞いてとてもうれしくなりました。

そして、涙を洗ってお風呂から出てきて、もっとびっくりしました。お母さんは、居間の一間幅の出窓のところに、風呂敷をひいてひな人形に見立て、お風呂上りの湯気の立つ私たちを一人ずつ座らせていったのです。お母さんは離れてながめたり、近くによって髪の毛や寝間着を整えたりしました。「どの子が一番かわいいかな。」と言うので、私たちはみんな精一杯のすまし顔でお母さんを見つめました。お母さんは腕組みをして見つめていましたが、「みんなかわいいよ。うちのおひな様は、どこのおひな様よりも一番かわいいね。」と言ってくれました。私たちはとても満足しました。

そして、そのあと折り紙で着物をつくり、顔を描いてくっつけて大きな段ボール箱に、段々に貼り付けました。これが我が家のひな人形となって、何年もの間、桃の節句を祝ってくれました。高価な人形より、この不揃いなおひな様の方が、私たち姉妹にとっては大切なおひな様になりました。

お母さんは私たちにお金では買えないものをふんだんに与えてくれました。そして、子どもの心を、いつも温かく迎えてくれました。

今、感謝の気持ちを込めて書きます。「おかあさん、ありがとう。」

親の愛情とは、物を与えることではなく心を与えることであり、子どもは、心豊かな親の姿から、知らぬ間に、その豊かさを学んでいくのだということを改めて感じさせられます。

私も4人の子をもつ親として、「あの時こうしておけば…」と後悔ばかりですが、親として伝えるべきことを、自分の姿で、言葉で、子にきちんと伝えていきたいと思えます。